

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 12 月 30 日

派遣者氏名（専門分野）	久保 美枝（ 美学 ）
-------------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	エドワード・バーン＝ジョーンズの素描群から辿る絵画空間と室内装飾
-------	----------------------------------

派遣期間

2011 年 11 月 18 日 ～ 2011 年 12 月 3 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	イギリス	ロンドン	テート・ブリテン(Tate Britain, Tate Store)	
		サウサンプトン	サウサンプトン市立美術館 (Southampton City Art Gallery)	
		ケンブリッジ	フィッツウィリアム美術館 (Fitzwilliam Museum)	

派遣先で実施した研究内容

19 世紀イギリスにおいてデザイナーとしてだけでなく画家としても活躍したエドワード・バーン＝ジョーンズ(Edward Burne-Jones, 1833-1898)が、アーサー・バルフォア(Arthur James Balfour, 1848-1930)の依頼により、バルフォア邸の音楽室を飾るために手掛けた連作絵画《ペルセウス・シリーズ》(*The Perseus Series*)、およびその素描群、原画の調査を行った。1875 年、トーリー党に入党して間もないバルフォアは、自宅の音楽室を飾る絵画をバーン＝ジョーンズに依頼、バーン＝ジョーンズはこの絵画の主題を『ペルセウス』に定め、音楽室を飾る絵画の制作を始める。この連作絵画の制作は、断続しつつバーン＝ジョーンズの亡くなる年まで行われたが、結局、未完に終わる。バルフォア邸の音楽室を飾る予定であったとされる、未完を含む 8 枚の油彩絵画は、現在ドイツのシュトゥットガルト州立美術館(Staatsgalerie, Stuttgart)に所蔵されている。シュトゥットガルト州立美術館所蔵の 8 枚の油彩画では、原画、水彩による習作画と制作段階を踏まえることにより、大幅な変更が連作絵画の構成、構図、モチーフに加えられたことが分かっている。派遣者は、原画・習作画・素描群を調べることで、これらの作品群と油彩画との比較検討だけにとどまらず、原画と水彩による習作画の比較検討をも行った。1876 年から 85 年にかけて制作された、サウサンプトン美術館所蔵の 10 枚の水彩の習作画は、縦およそ 150 cm、横幅は 120 cm を超えたものであり、油彩画とほぼ同程度のサイズであり、油彩による仕上がりの構図・構成を見込んだ習作画群であると位置づけられている。派遣者は、この習作画群を実見することにより、色彩の確認、また透けて見える下絵の痕跡の確認を行い、写真に収める。また、これら水彩画の制作年に注意を向けつつ、個々の作品を見比べると、連作の習作画といえども、その構図・構成・彩色においてよく仕上げられたも

のとそうでないものがあり、その仕上げの格差が大きいことに気付く。
フィッツウィリアム美術館では、主に人物像・とりわけ裸体像の素描群の調査を行った。《ペルセウス・シリーズ》の制作に取り掛かった1870年代半ば以降は、バーン＝ジョーンズが1873年にイタリア旅行を終え、ミケランジェロの人物描写に強い影響を受けていた時期であると言われている。この時期、バーン＝ジョーンズは人物像・裸体像の習作に励んでおり、《ペルセウス・シリーズ》における人物描写の習作も、まず裸体像の素描に重きが置かれていたといっている。また、イタリア旅行を終えた後の作風がどのように変化したのかを考察するため、バーン＝ジョーンズが1873年のイタリア旅行で使用した1冊のスケッチブックの実見調査を行った。《ペルセウス・シリーズ》に関する素描群としては、絵画空間の構図を意識した人物像の素描から、万年筆で気負いなく描かれたペルセウスの足の素描に至る調査を行い、派遣者は素描群のこまかな記録をつけた。

テート・ブリテン所蔵の《ペルセウス・シリーズ》の原画をテート・ストア(Tate Store)にて初見。この原画は、1875年から76年にかけて制作、3組にわけられた10枚のモチーフから構成されている。またバルフォア邸の音楽室の壁を、絵画でどのように飾るのかということも考案されており、それらモチーフの配置まで決められていた。サウサンプトン美術館蔵の水彩画は、制作年の早いものに限り、この原画に沿った構図を採っているが、晩年近くに描かれた、ペルセウスがメデューサの首を水面に映すモチーフは、原画の構図を大きく変更したものとなっている。原画での構図は、ダンテ・ガブリエル・ロセッティの絵画において先行する型があることが指摘されているが、変更後の構図におけるその型についての言及は行われていない。派遣者は、この変更された構図には、中世のキリスト教写本挿絵に先行する型があるのではないかと考えているため、これから調査をすすめていく。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画空間における遠近感の浅さは、同時代批評において既に指摘されている。派遣者は、この遠近感の浅さを下絵段階における素描群との関係から考察しようとした。本調査に先立ち、派遣者は、バーン＝ジョーンズの彩色が施される直前の、また一部彩色された習作、素描をバーミンガム美術館にて実見した。彼の素描では、ほぼ正方形の升目を敷いたうえで、絵画の空間構成がとられている。彩色を施す段階、また絵画制作へと移行する直前においても、下絵に升目を敷いている。今回調査したサウサンプトン美術館蔵の《メデューサの死・2》(*The Death of Medusa II*)においても同様、升目の線を残した状態で彩色されており、バーン＝ジョーンズの絵画空間は奥行きが追及されなかったものであるといえるだろう。しかし、10枚の水彩習作画において最も奥行きが浅く、画中に文字を組み入れた2つのモチーフ、《ペルセウスとグライアイ》(*Perseus and the Graiae*)と《メデューサの死・1》(*The Death of Medusa I*)は、最終段階の油彩画では採用されていない。この《メデューサの死・1》は、原画の段階では、裾絵が付けられる予定であった。原画では、10枚のモチーフの四方をアカンサスの葉が囲んでいる。このように室内を装飾することを目的として考案された連作絵画は、最終段階とされる油彩画の一部が未完であるため、絵画による室内装飾が遂行できなかったとされている。そしてこれら絵画が未完で終わったことの原因として、バーン＝ジョーンズのすぐれない体調により制作が中断されたからだとも言われている。一方で、《ペルセウス・シリーズ》よりはるかに長い歳月をかけて制作された《ブライアー・ローズ・シリーズ》(*The Briar Rose Series*)は、画家の晩年、室内を飾る連作絵画としてその役目を果たしたものである。この連作絵画も、様々な段階を経て構図や連作絵画の構成に変更が加えられた。派遣者は、室内装飾としてのこれら二つの連作絵画を比較すると、《ペルセウス・シリーズ》では、モチーフ選び、壁面を飾る絵画空間の構成の仕方に不都合があったのではないかと考える。今後、この2作品の連作絵画の比較を通じて、室内装飾を可能とするに至った彼の絵画空間の特徴を、連作絵画の主題・モチーフをどのように表現しようとしていたかという問

題も含めて、さらに考察をしていく。

派遣後の研究発表の予定

本調査を含めた博士論文の提出。ラファエル前派を専門とする学術雑誌に投稿。